

【本文】

第廿一回 濱路竊に親族を悼む  
糖助病て其子进行思ふ

再説大塚墓六は、信乃を迎とりてより、女房龜篠共侶に、いと愛々しく管待すものから、只外間を飾るのみ。こゝろに刃を磨ぐ事多かり。そをいかにぞと尋れば、墓六既に里人等を欺きて、番作田を横領し、これはしも信乃が為に、一毫も用ひざれども、いまだ村雨の大刀を得とらず。これを手に入れて後、彼少年を結果ん。さるときは宝刀によりて、わが身いよ／＼發跡べく、又濱路には佳婿招て、わが身ますます老樂なるべし。しかはあれども、願ふに信乃が面魂、凡庸の童ならぬに、早りて事を為損ぜは、毛を吹て疵を求め、果は原價にしかたからん。只真成に款待して、由断さするにますことなし、と腹裡に深念しつ、龜篠にのみ機密を告て、斯謀るにぞありける。

かくれば信乃が危きこと、石の下に生成す鶏卵、薪に巢籠る雛禽に異ならねども、親の先見遺訓あり。加るに才器勇悍、牛若をも欺くべく、正行にも劣らざる、稀有の少年なりければ、その情をよく知りて、片响も心を放さず。舊宅にありし日より、伯母の宿所に移りし日より、件の宝刀は腰に離さず、坐るときは傍にとり措き、臥すときは枕によせて、護る事等閑ならねは、兪児の隙あることなし。主客の勢ひかくの如くにして、一トとせあまり送りつ、奸智に長たる墓六なれども、怒に手をかけて、見咎められなば年来日ころ、心尽しも泡と消て、わがうへならん、と咄む程に、兪むこゝろの稍懈りて、今茲又思ふやう、村雨の大刀、手に落とも、信乃が安穩でこゝろにをらば、それを管領家へ進らするに由なし。よしや彼宝刀、今わが有にならずとも、主も物もこゝろあり。わが物にあらずとも、わが家にあるなれば、終にはわが有となるべし。只管こゝろ早ればこそ、その謀 施しかたく、よろづ不便にして、なか／＼に危し。女兒濱路は尚稚きに、今よりして十年待ともそのことの遅きにあらず。遠く謀れば長く利あり。短慮は功をなしかたし、と漸に思ひかへしつ、龜篠にも、そのこゝろを得させて、且く盗むの手を藏め、只をり／＼額感に、信乃が意中を撈らすれども、これ將便りを得たるにもあらず。されば亦、額感は、件の事を、主夫婦に問るゝ毎に、陽には信乃を讒れども、書になるべき事をはいはず、その問わし事、答しよしを、竊に告ざるこののなれば、信乃はます／＼由断せず、これも陽には伯母を慕ひて、小廝にひとしく使れけり。

かくて二氣柱再して、春と明け、爍と暮れ、流るゝ月日に委みなければ、文明もはや九年になりつ。この年信乃は十八歳、濱路は二ッ劣りにて、二八の春を迎へしかは、花然んとして、月の

前に芳しく、柳翠をまして、霞の間に戦くに似たり。彼は奇才の弱冠なり、此は嬋娟たる少女なり。その器その色、鄙には稀也。この夫にしてこの婦あらんは、寔に天縁なるべしとて、里人これを譽ぐるものなく、莊官夫婦を見る毎に、その婚姻を催促す。臺六も龜篠も、豫ていひつる事あれば、この返答に迷惑して、書心こゝんに再發し、竊に信乃を結果ん、とこゝろ急ぎのせらるれども、十二歳の時だにも、謀りかたき才子なるに、今はや丈夫になりて、身長五尺八九寸、臂力も定めて強かるべし。二葉にして摘ざれば、竟に斧を用るとぞいふなる。はやくうしなふべかりしに、悔しき事をしてけり。と臍を噛どもその甲斐なく」とちせまし、かくやせまし」と案じ煩ひたりける折、隣郷忽地騒動して、不慮の合戦起りにけり。

緣故を尋るに、粵に武藏國豊嶋郡豊嶋の領主に、豊嶋勘解由左衛門尉、平信盛といふ武士ありけり。させる大名ならざれども、志村十條尾久神宮など、數郷を管領し、その弟、煉馬平左衛門倍盛は、則煉馬の館にあり。この餘、平塚圓塚の一族臺延して、宋めでたき舊家なり。信盛兄弟、その初は、両管領に従ひて、聊、怒るよしありて、遂に胡越の思ひをなせり。尔るにこの比、管領山内家の老臣、長尾判官平景春、越後上野兩國を伐靡て、既に自立の志あり。よりにて豊嶋を相譚ふに、信盛立地に一味同意して、いよ、管領に従はず。さる程に、山内扇谷の両管領、しのびへに軍議を凝らし、敵の威勢微なるうちに、先はや豊嶋を討んとて、文明九年、四月十三日、目田備中介持資植、刑部少輔千葉介自胤等を大將にて、軍勢凡一千餘騎、不意に發て、森々と、池袋まで推寄せたり。豊嶋がたには由断して、敵寄すべしと思ひかけねど、一族いつれも近きに在れば、鎧投被け、馬騎走らし、彼此より集會しかば、惣大將信盛の一陣に、煉馬平塚圓塚の、軍兵合せて三百餘騎、江古田池袋に馳向ひて、鬨を咄とあはせし、征箭を射かくる

【挿絵】「豊嶋の一族管領家の三將と池袋に戦ふ」「煉馬平左衛門倍盛」「植杉刑部」「千葉ノ介より胤」

程こそあれ、両軍入素れ、遣違へ、撃つ撃れつ、火花をちらして、半日あまり戦ふたり。豊嶋は小勢なりけれども、初度の戦ひに、千葉植杉を殺崩して、頻に捷に乗るものから、事不用意にして、腰兵糧を携えず、士卒漸々に飢渴に勞れて、引退かんとする程に、奇手の大將備中介持資、麾うち揮て味方を激し、短兵急に攻立れば、豊嶋がた辟易して、撃るゝものその數をしらず、千葉植杉等これに氣を得て、魚鱗に備へ、十文字に駆散し、息を吻せず援たりければ、豊嶋の士卒は算を紊して、悉、砍伏られ、剩、信盛倍盛も、乱軍の中に撃れにけり。憐むべし、豊嶋煉馬の両大將

一朝の怨みによりて、強弱の勢ひを揣らず、一族郎黨、数を殫して、舊家忽に亡びにけり。  
これによりて世間目く静ならず、菅菰大塚の里までも、人のこころの穩ならねは、又只曇六  
龜篠等は、これを幸ひの事に思ひて、かくては子どもの婚姻も、今茲は整ひ難がるべし、明年波風  
おさまらば、必濱路を妻はして、信乃に村長を譲かると、里人等にもよしを告、且一界を逃れ  
けり。

されば亦曇六が養女濱路は、八九歳の比よりして、二親の口づから、「信乃は夫よ、汝は婦よ」と  
いひ囃したる言葉の露を、実事と受て海土が汲む、なまこころつきしより、よに恥しく觀しくそ  
れとはなしにその人に、物いはるゝも樂しくて、心に入て仕へたり。尔も彼二親は、養ひ女とい  
ふよしを、濱路には告もしらせず、只生育の子のごとくすなれど、竊に告るものありて、実の親は  
煉馬の家臣、某之といふものにて、同胞もあるよしを、濱路が灰に傳聞しは、年十三の比なるべ  
し。「これにて思ひあはずれば、現在の親達、人には愛ることく見すれど、口と心は表裏にて  
傍に人のなき折は、さもなき事を罵辱め、捺ると見せて撮縮ること、稚きときは、しばゝなり  
き。その字みの恩、浅きにあらねど、現生さぬ親子ばかり、いと悲しきものはなし。抑わが実の  
親は、煉馬殿の家臣にて、何と呼るゝ人やらん。又同胞もありといふなる、わが為には兄弟、弟、  
姉なるべき歎。妹さへ、ありやなしや」と人傳に、問よし絶て涙の袖を、親には見せず親をおも  
ふ、こころ筑紫の果ならぬ、故郷は三里に足らずと聞く。しかはあれどもわが為には、鞍馬の九折  
ならで、近くて遠き物思ひ、春の儲に牽出す、馬の背で來る土蘿蔔、煉馬と聞けば恋しきに、思ひ  
かけなき憂ひを倍て、「今茲煉馬家滅亡し、一族豊嶋平塚はさら也、従類士卒入かたならず、撃れ  
たり」と聞えしかば、濱路は哀しさやるかたなく、「さあらんにはわが実の、親胞兄弟も脱れ給は  
じ。なほ母へのまします歎。婦女子は助けらるゝ共、よるべなくこそをはずめれ。こころ得かた  
し、養親達、吾儕に実父母あるよしを、白地に告給ふとも、襤褸の中より養れし、恩愛を化にや  
はすべき。しらざりし日は是非もなし。親胞兄弟のあるよしを、灰に聞つゝ各もしらず、その陣歿  
の迹をしも、吊ふ

【挿絵】「木からはまたふかねとも君見ればはつかしのもりにこの葉もなし 信天  
翁」「はまち」「犬塚信乃」

ことならぬは身ひとつに、係る過世の悪報歎。さて何とせん」とばかりに、啼音憚る白眉の草虫  
脚つや袖の露乾て、泣兒人に見られじ、となほす化粧も朝霜の、鮮て落るは涙也。

さる程に、濱路はつくゝと思ふやう、心の憂やるかたなれど、右を見ても左を見ても、相譚

ふべき人はあらず。吾儕の為には犬塚ぬしのみ、まだ婚姻はせざれども、幼きより二親の、許し給ひし夫にこそ。その心ざま精悍しく、浮たる事は一点なくて、よに憑しき人と見つれば、身の憂事を明々地に、告てその智を借らんには、実の親の姓名も、その存亡もしるよしありて、その陣歿の迹をしも、わが為に吊給ふ事なからずやはと尋思しつ。いかで告んとしのびくんに、人なき折を頼ふに、有一日信乃は、子舎に籠りて、独机に臂を倚かけ、『訓閲集』を読んでをり。濱路は竊に歡びて、足を翹、ほとりにいゆきて、物いはんとする程に、忙しく来るものあり。濱路は吐嗟と走り出たる、これ彼の足音に、信乃ははじめて見かへれば、後に來つるは龜篠也。

當下信乃は机を掃遣り、起迎んとしつれども、龜篠は隔亮を、開たる隨に裡面には入らず、走り躡るゝ濱路が背を、訝しげに目送りつ。「やよ信乃よ、和殿も豫てしることく、糠助阿爺が長き病著、昨けふはいと危く、湯液も咽喉に下らず、と四隣の人に今聞つ。むかしは和殿が宅に隣りて、親く交参たるものなれば、息の内に今一たび、見まほしといふとなん。そが葬の事ならずは、醫師の藥礼なごの事故。いづれまれ、貧人に、親めは徳はえつかず、あな無益し、と思へ共うちもおかれず告る也。訪んと思はゞ疾ゆきね」といふに信乃はうち驚き、「そは苦々しき事に侍り。往に安否を問しとき、さまでには見えざりしか、齡六十に餘れる人の、時疫なれば心もとなし。とく往てかへり候はん」と応て聽て刀を引提、起を見かけて龜篠は、納戸のかたへ赴きけり。畢竟糠助、犬塚信乃に對面して、いかなる事をいひ遣せる。そは次の巻に鮮分るを見てしらん。